妊婦および夫の嗜好品による心身障害児発生の防止対策に関する研究

― 飲　酒　と　妊　娠 ―

東北大学医学部産科婦人科学教室

高林俊文・阿部洋一
劉　雪美・佐藤信二
太田憲道・荘　漢一
安部徹良・平野睦男
鈴木雅洲

1. 研究目的

1973年Ulleland らによる「Fetal Alcohol Syndrom」の報告以来，アルコールによる胎児障害の危険性について注目される様になった。我が国における女性及び男性の飲酒についての報告は少なく，特に妊娠中の飲酒及び夫の飲酒が，その妊娠や胎児に及ぼす影響についての疫学調査は皆無といってよい。そこで妊婦及び夫の飲酒が妊娠，分娩，胎児に与える影響について調査し，その因果関係を知ることを目的とした。

2. 研究方法

昭和52年から昭和54年の3年間に，全国11大学より収集した統一プロトコールを基に，妊婦および夫の飲酒について検討した。

妊婦については，妊娠時期を前期のみ飲用したもの，妊娠中末期のみ飲用したもの，妊娠全期間飲用したものに分け記入させた。又，夫については時間を特に設定しなかった。又，飲酒の量については表Ⅰのごとく週4～7回，週1～3回，月1～3回をそれぞれA，B，Cとし，又1回の飲酒量を日本酒3合以上，又はビール3本以上をイ，日本酒1～2合，ビール1～2本をロ，日本酒も1合以下又はビール1本以下をハとして記入する様にした。matched control をとらなかったことから，今回は表Ⅱのごとく大量群，中等量群，少量群に分類し，それぞれの群における傾向を以下の分娩様式 Apgar Score，SFD 児の発生率，早産児の発生率，児の奇形等の項目について検討した。

3. 研究成績

(1) 妊婦の飲酒

表Ⅲのごとく全国11大学より収集された症例は全部で1,947例であった。妊娠初期のみの飲酒は470例，中末期のみは274例，妊娠全期間飲酒は856例であった。しかし妊娠初期のみしか記入してないもの209例中・末期のみ記入したものは70例であった。不明のもの68例であった。

① 飲酒の時期と程度の割合

表Ⅳのごとく妊娠中に飲酒している1,879人中大量群は7.7%と少なく，全妊婦を考えると非常に少ないと考えられる。又，少量群は約70%であった。

② 飲酒の程度と年令分布

大量群ではその割合が年令と共に増加する傾向がみられた。中等量ではその割合は年令分布により差はなかった。

③ 分娩様式

飲酒妊婦全体として自然分娩（80.7%），吸引分娩（8.4%），帝王切開（5.4%），骨盤位分娩（3.5%），鉗子分娩（2.0%）の順であった。帝王切開，骨盤位分娩は飲酒量が増加するに従い多くなる傾向が見られ，骨盤位分娩には特に強い傾向があった。

④ 生後1分後の Apgar Score

全体として7～10点（95.6%），3～6点（3.3%），2～0点（1.1%）であり，大量群，中等量群，少量群に何らの傾向も見られなかった。

⑤ SFD 児の発生率

全体として大量群4.5%，中等量群4.2%，少量群4.2%と大量群で多くなる傾向が見られたが，有意の差はなかった。

⑥ 早産児の発生率

全体として，大量群7.6%，中等量群3.4%，少量群

3.8%と大量群に多い傾向が見られたが有意の差はなかった。

⑦ 児の奇形

奇形症例数は47例で，発生率は2.5%であった。一般的な奇形発生率に比べ少々高い傾向が見られたが，副耳，内反足，外反足，血腫などを奇形の範ちゅうに入れたことが原因と考えられる。又，飲酒量との関係は得られなかった。種類としては，多いものより多発奇形，副耳，無脳児等の順であった。

(2) 夫の飲酒

表Vのごとく全国の11大学の協力により，症例7,940例が収集された。妊婦の飲酒と同様に大量，中等量，少量と区別し比較した。

① 飲酒の程度と年令

表Ⅵのごとく大量飲酒群は年令が高くなるにしたがって増加しており，特に35才以上の飲酒をしている夫の70%以上が大量群に入っていた。

② 分娩様式

自然分娩(81.1%)，吸引分娩(8.9%)，帝王切開(6.3%)，骨盤位分娩(3.3%)，鉗子分娩(0.7%)の順であり，飲酒量による傾向は見られなかった。

③ 生後1分後のApgar Score

各群とも7～10点が95%以上を占め，3～6点(3.4～4.0%)，2～0点はいずれも1.4%以下であった。

④ SFD児の発生率

大量群4.8%，中等量群4.6%，少量群4.4%と飲酒量にしたがい増加する傾向が見られたが，有意の差は見られなかった。

⑤ 早産児の発生率

大量群4.6%，中等量群4.1%，少量群4.5%と飲酒量における傾向，一般の発生率との差などは見られなかった。

⑥ 児の奇形

奇形発生率は全体として2.0%であり，大量群(1.9%)中等量群(2.0%)，少量群(2.7%)と飲酒量による傾向は見られなかった。

4. 要 約

妊娠中に飲酒している女性の数は約1,800名と多いが，飲酒量はごく少量が大半を占めていた。帝王切開，骨盤位分娩が大量飲酒群に多い傾向，又SFD，早産率も高くなる傾向があったが，有意に増加してはいなかった。夫の飲酒では年令が高くなるにしたがって飲酒量が増加することがわかった。又，SFDも大量飲酒群で増加傾向がみられたが，有意の増加ではなかった。その他については，何ら因果関係を示唆するものが得られなかった。

表Ⅰ　平均飲酒回数と平均1回飲酒量

（回　数）	（飲　酒　量）
A：週4～7回	イ：日本酒3合以上，ビール3本以上
B：週1～3回	ロ：日本酒1～2合，ビール1～2本
C：月1～3回	ハ：日本酒1合以下，ビール1本以下

表Ⅱ

大量飲酒群	A－イ，A－ロ，B－イ
中等量飲酒群	A－ハ，B－ロ，C－イ
少量飲酒群	B－ハ，C－ロ，C－ハ

表Ⅲ　妊婦の飲酒：各大学の症例

	症例数
北大	238
山形大	80
福医大	165
東北大	411
東京大	321
慶応大	21
京大	286
京府大	87
金沢大	36
三重大	4
広島大	298
計	1947

表Ⅳ　飲酒の時期と程度の割合

	妊娠初期のみ飲酒	妊娠中・末期のみ飲酒	妊娠全期間飲酒	妊娠初期のみ記入	妊娠中・末期のみ記入	計
大量群	37 (7.9%)	11 (4.0%)	84 (9.8%)	7 (3.3%)	6 (8.6%)	145 (7.7%)
中等量群	95 (20.2)	76 (27.7)	209 (24.4)	35 (16.8)	17 (23.4)	432 (23.0)
少量群	338 (71.9)	187 (68.3)	563 (65.8)	167 (79.9)	47 (67.1)	1302 (69.3)
計	470	274	856	209	70	1879

表Ⅴ　夫　の　飲　酒

（５２年１１月～５４年１２月）

各機関	症例数
北大	１４１６
東北大	１３１１
山形大	６００
福医大	４８６
東京大	７７２
京都大	９９７
京府大	３４９
金沢大	１８４
広大	１８０２
三重大	２２
奈医大	１
計	７９４０

表Ⅵ　夫の飲酒の程度と年令

	19才以下	20～24才	25～29才	30～34才	35才以上
大量	7 (63.6%)	188 (49.6%)	1707 (60.6%)	2074 (65.8%)	872 (72.6%)
中等量	2 (18.2)	114 (30.1)	728 (25.9)	709 (22.5)	230 (19.2)
少量	2 (18.2)	77 (20.3)	380 (13.5)	371 (11.8)	99 (8.2)

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

4.要約

妊娠中に飲酒している女性の数は約 1,800 名と多いが,飲酒量はごく少量が大半を占めていた。帝王切開,骨盤位分娩が大量飲酒群に多い傾向,又 SFD,早産率も高くなる傾向があったが,有意に増加してはいなかった。夫の飲酒では年令が高くなるにしたがって飲酒量が増加することがわかった。又,SFD も大量飲酒群で増加傾向がみられたが,有意の増加ではなかった。その他については,何ら因果関係を示唆するものが得られなかった。